

の、過去のこと、未来のこと、人の心などの霊視、あるいは予言ができるのを、云うようである。

その人は、N師(昭和二年生まれ)、K寺(神戸)の山主、高野山真言宗伝燈大阿闍梨である。毎月の縁日には、全国から大勢の人々が参拝に訪れる。このような霊視という、時間と空間を超越した能力は、空海の説く身口意の行、自己放棄の瞑想、他者への奉仕、祈りなど、とくに、求聞持秘法によって開発できるものかどうか。N師の説教集や談話集(春秋社発行)を見ると、N師は、信じ難いほどの身の危険を重ねて、修行に励み、結果として、不思議にも九死に一生を得た、と云われる。死の淵からの生還、このことが、鍵になっているかもしれない。修験道の修行を極限まで推し進めたもの、というより、さらに、それを越えるものであったようである。

N師は、高野山大学密教学科を卒業し、高野山大学の職員であった経歴をもつ。現在、毎月の説教では、いつも空海の言葉に熱心に説いておられる。それにもかかわらず、N師の超常能力の獲得、時間・空間からの超越は、高野山の説く即身成仏法とは違うのではないだろうか。超越を科学として解釈する試みについて、述べる。

幸西と証空における信

那須 一雄

法然(一一三三—一二二二)門下のうち、自己の救済の道を、特に阿弥陀仏の他力の働きに見出すグループに属する諸師においては、阿弥陀仏に対する信を得るということが、阿弥陀仏に

より救済されるか否かの大きな分岐点となった。諸師により形態は異なるが、その信もまた、他力的な色彩の強いものと言える。本論で取り上げる、幸西(一一六三—一二四七)と証空(一二七七—一二四七)はこのグループに属し、阿弥陀仏に対する信を得ることに重点を置いて、自らの教義を説き示す。

この二師の信理解を検討すると、両者とも、救済に必要とされる信について、仏と衆生との一体性を説く。だが、善裕昭氏が指摘されるように(「幸西の仏智一念説について」法然学会論叢第八号、平成四年)、幸西においては一体性は説くものの、衆生の信と仏(仏智)とを区別して考えている。これに対し、証空は、仏と衆生とを区別して考えず、仏の理性が衆生の信心に遍満しているとする立場を示す。

信心において、同じく仏と衆生の一体性を説きつつも、二師において、上記のような違いが見られる理由としては次のようなことが考えられる。則ち幸西においては、此土における「具縛の凡夫」(『玄義分抄』日本大蔵経第九十卷三八〇頁下段三行目)としての自覚が強く、此土において信を得て以降であつても、そこでの状態は、死後、浄土において念仏者が達する状態よりも遙かに劣ると見る。それ故に、幸西は、此土において衆生の信と仏(仏智)とを区別して考えているのだろう。一方、証空においては、此土において信を得て以降の衆生の状態は、死後、浄土において、念仏者が達する状態に準ずると見る。(例えば『定観門義』西山全書第三卷二〇八頁四行目—七行目「憑弥陀心深成、学顕弥陀所有功德、生浄土可為、且且穢土習修、遣退惡進善心、修一善止一惡、廻向生浄土」。それ故に証

空は、信を得て以降は、仏の理性が衆生の心に遍満すると見るのだろう。

以上のように、此土で信を得て以降の状態と、死後、浄土で達する状態との間に優劣を見るか否かという点について、二師は対照的な説を示す。そしてこの違いが、此土において聖道門的な行業を認めるか否かという教学的立場に関連してくる。則ち、「具縛の凡夫」の自覚が強く、此土で信を得て以降の状態は、浄土往生後に達する状態より遙かに低いと見る幸西は、此土において聖道門的な行業を認めない。(聖道無得道説)。(なお幸西は、浄土に往生したならば、菩薩の第四十一位(初地)に達し聖者となる故に、聖道門の教えは有効になるとする)。これに対し、此土で信を得て以降の状態は、死後、浄土において達する状態に准じるのであり、仏の理性が念仏行者の心に遍満すると見る証空は、信を得て以降は、聖道門的な行業も開会され、此土における行業として認められるとする立場を示している。(証空は、念仏行者は、浄土において第五十一位等覺位に達するとする)。

以上のように、幸西と証空は、衆生が此土で信を得て以降の状態と、死後、浄土において達する状態とを比較する中で、此土における信について認識する。そして、浄土往生後に達する状態と比較する中で捉えられた信理解が、此土での行理解、特に聖道門的な行業を認めるか否かを判断する上での根拠となっている。則ち二師は、同じ問題意識の下で、信に関して理解している。そして互いに対照的な説を示している。以上のような点において、幸西と証空二師の間における、信に関する思想交

渉を読み取ることができる。(法然門下のうち、幸西や証空と同じく、自己の救済の道を、特に阿弥陀仏の他力の働きに見出すグループに属する、隆寛(一一四八―一二二七)や親鸞(一一七三―一二六二)の信理解においては、このような教学的な論理の展開は見られない)。

良忠の本願観——『観経疏伝通記』を通じて——

沼倉 雄人

浄土宗三祖然阿良忠上人において諸行非本願・諸行往生の問題が注目され、凝然『浄土法門源流章』にも、教義的な特徴としてとりあげられている(『浄全』一五、五九九頁下)。善導が本願に誓われた称名念仏による罪惡生死の凡夫の報土往生を示し、法然が『選択集』を通じて廢捨を勧めた諸行を往生可能と提示することはどのような解釈によるものか、善導『観経疏』の注釈書である『観経疏伝通記』(以下『伝通記』)の整理から、諸行往生説の淵源の一端として、良忠の本願観について検討を行いたい。

良忠は慧遠『無量寿経義疏』の分類を基本とし、独自に四十八願の分類整理を行い、本願を分析している。『伝通記』の中で四十八願の分類に関する説示を整理すると(1)施為・趣求に準じる二分類、(2)摂衆生願の三分類(凡夫、二乗、菩薩所託)、(3)凡夫引接の願、などがあり、これらの説示から良忠の四十八願分類を整理すると以下のようなになる。

撰法身、撰浄土の五願(趣求)：第十二、十三、十七、三十

一、三十二願